会場をあとにする人びとの幸福な表情。

「ひとりっ子の私は幼いころ、両親と祖母という大人ばかりの食卓が、しいんとならないように、笑わせることばかり考えていました」

柳井沙羅さんは振り返る。いわば、奉仕の精神だ。それが現在のステージ活動の地下水となり、人びとの心を摑んでいるにちがいない。シャンソン歌手だがトークが絶妙。会場は笑いの渦なのだ。

生まれは合併前の羽合町。大阪芸大に進むが、そこですぐにシャンソンというわけではなかった。自分が何をやりたいか、暗中模索を繰り返した。「故郷の蝉しぐれや川のせせらぎが音楽」だった乙女はひょんなことから劇団に入ると、シャンソンの大曲と格闘するようになり、20歳でオーディションを受け……とまだまだつづく試行錯誤だが、才気を認める人は必ずいて、「気がつけば……」シャンソンの依頼が増えていった。

ふるさと湯梨浜に1997年にオープンした文化施設ハワイアロハホールの大ホールのこけら落としにも歌った。その湯梨浜に、夫のリタイアを機に帰ってきた。なんてきれいな空気なんだろう、とつくづく感じ入った。この感じを表現するのにも、ギャグを出さずにはおかない。

「シャンソン歌手ではなく、山村(さんそん)歌手よ」。

むろん歌も素晴らしいが、「私はお客さまを喜ばせることをいちばん大事にしています」というエンターテイメントの温かさ。それは終演後、会場をあとにする人びとの幸福な表情に実証される。

シャンソン歌手　柳井沙羅

ゆう、ゆり はま